



日記「少数意見」



— 5 社会事象編 —

JUN

2001年11月12日(月) マスク

NBC緊急避難用マスクを買った。炭そ菌、天然痘、サリン等を防げるとのこと。

このことを人に話すと、「そんな事までして生きていたいと思わない」という反応が返ってくる。私は事務所のデスクの中にサバイバルナイフ、カバンの中にはスイスアーミーナイフを持ち、模造刀を枕元において寝る人だから、とても臆病な人間なのかもしれない。

しかし、「そんな事までして生きていたいと思わない」と言う人が危機を具体的に意識して生きているかは疑わしい。映画の話になるが、欧米にはパニックものをはじめとして個人が強大な自然の力又は人間の暴力に一人で立ち向かう姿を描いた作品が多い。ポセイドン・アドヴェンチャー、ジョーズ、ダイハード、ランボー、エイリアンなど。日本にはこの手の映画は少ない、ゴジラのように圧倒的な力に人間がひれ伏すかたちのものが多い。

どうも日本には理不尽な力に対して個人が（集団ではなく）抵抗するという文化が希薄なように思える。危機をあえて直視せず、それが来た場合には運命として甘受するというパッシブな精神が支配している。

私は昔のいじめられっ子の体験がトラウマになっているのか、暴力に過敏になっている。相手が自然であれ人間であれ、簡単には負けないように自分を鍛え備えを怠らないように心がけているつもりだ。その努力は結局なんの役にも立たないかもしれないが、それでもいいではないか。人間みな最後は死ぬのであって、結果に違いはない。違うのはそこまでの過程であり、それは平凡な毎日をどんな意識をもって生きるかということだから。

2001年11月19日(月) バイオテロ

スティーブン・キング原作脚本の「ザ・スタンド」（二本組み6時間のビデオ）の前半を見た。実は、この小説は以前ペーパーバックで1141ページの1/4ほど読んで、難しいのでやめたものだった。米国で開発されていた細菌兵器が研究施設の外に漏れ人類が絶滅の危機に瀕する。そこで生き残った者が善と悪に分かれて対決するという物語らしい。この細菌は人工のものらしく、致死率はほぼ100%だ。キングが最初にこの話を書いたのは1978年のことでその当時はまったくの空想であったに違いない。しかし、今日これは現実の問題である。

私は最近バイオの仕事をしており、その関係の本を読むことが多い。バイオの技術の進歩は著しく昨日夢であったことが今日は現実になっている。悪夢もまたしかりである。米国では天然痘がテロリストに使われることを恐れワクチンを用意していると言う。しかし、使われるのは既知の細菌とは限らない。遺伝子組み換えによって自然界に存在しない細菌を作ることができる。たとえば、肺ペストのように致死率が高くインフルエンザのように簡単に空気感染するものができるかもしれない。ありふれた細菌やウィルスを組み合わせて強力な細菌兵器ができるかもしれない。すでに米国や旧ソ連ではこのような開発が行われていたと思うが、今は国家でなくてもそれは可能だ。

テロリストがベンチャー企業を作ってゲノム創薬の研究をすると称して製薬会社から資金を集める。製薬会社は気楽にこの手の金は出すようだ。テロリストはその金で細菌兵器を作る。製薬会社が成果が上がらないと文句を言い出すころにはベンチャー企業はもぬけの殻で、世界のどこかで正体不明の疫病が発生する。いつ起きてもおかしくない悪夢だ。

2001年11月24日(土) 50年後の世界

並外れた体力を持つ中学3年Aは総番長として地域の中学に君臨していた。ライバルと目された隣町の番長が失脚してからAの立場を脅かす者はいなくなった。しかし、そんな絶対者Aにいたずらを仕掛けてくる者がいた。トイレにAを非難する落書きがあったり、Aの机の上の消しゴムがなくなったりした。とうとう、Aのカバンの中の弁当が食べられるという事件が発生し、Aは怒り心頭に発した。何の証拠もなかったが、Aは犯人は中1のOだと決め付けた。Oは以前からAに反抗的な態度をとっていた。OはAに追われて学校の裏山に逃げ込んだが、Aは他の中学の番長に呼びかけ、兵隊を出して山狩りをするように命じた。他校の番長もそれぞれ自分の中学に反抗分子を抱えていたので、いい見せしめだと思い全面的に協力することになった。包囲網は狭まり、Oは逃げ場を失い裏山の洞窟に隠れている。

この物語は現在進行中の出来事を戯画化したもので、ひとつの見方ではあると思う。もちろんOはオサナ・ビンラディンでAはアメリカないしはブッシュである。中学校のいじめにたとえるのは不謹慎というむきもあろうが、善対悪の構図で捉えるよりよほど健全な見方ではあるまいか。

そこでつらつら考えると、物事はオサマのシナリオどおりに進んでいることに気付く。彼は一方的に敗北することによって米国の暴力を印象付け、米国の支配に反感を持つ人々の憎悪に油を注ぐ。オサマの役割は自分の代でこの戦争に勝利することではなく、多分数十年続く長期戦を後に続く者が有利に戦えるように方向付けるための捨て駒になることなのだ。彼は悲劇を演じ、その物語が語りつづけられることによって、大きな流れを作っていく。オサマの顔には悲劇がよく似合う。

私は今回のテロを国家対反国家の戦いの始まりと位置付けている。その意味では炭そ菌事件も、犯人が仮にイスラムと無関係であったとしても国家解体をもくろむ者であろうから、同じ戦争の異なる局面の話である。アラブ諸国を含めて多くの国が今回米国に同調したのは、それぞれの国が自国内に反国家勢力を抱えていたからである。国家間の戦争の時代が過ぎ、国家内の民族、宗教間の戦争が多発し、次は国家の存在自体を悪とし、国家を崩壊させようとする動きが顕著になる。

近代国家は統一的な価値観の下に少数者を切り捨てる。少数者は宗教や民族だけが理由となって発生するものではない。個人の価値観が国家のそれと違うために阻害され、孤独なテロリストになる者もあるだろう。炭そ菌事件の犯人は多分そんな一人だろう。こんどの戦争はこのようなローンウルフを含めたテロリストと国家との戦いなのだ。その意味で貿易センタービルも大きかったが炭そ菌は世界史的にみればより画期的かもしれない。なにしろ個人（だと思ふ）が国家、それも超大国、に挑戦しているのだから。沢田研二が自分のアパートで原爆を作る理科の教師の役を演じた「太陽を盗んだ男」を思い出す。

この戦争は50年続くと言う人がいる。では50年後の世界はどうなっているだろう。私は国家が消滅することによって戦争は終わると思う。いくつかの大都市が核によって灰になり、強力な細菌兵器が使われ、まず都市が崩壊する。人々は群れることが標的になることに気付き、分散する。サイバーテロによってインターネットも破壊され、細菌検査を受けた郵便によってのみ各集落はコミュニケーションする。ケビン・コスナーの「ポストマン」の世界だ。まあ、これでもいいほうかもしれない。細菌兵器しだいでは「12モンキーズ」の世界になる。

2001年12月25日(火) 戦争

不審船との銃撃戦の話題で盛り上がっている。ニュースキャスターも、ワイドショーのコメンテーターも、政治家も、異様に気分が高揚している。みんながやっている「戦争」というゲームにやっと参加できたからか。

日本人は娼婦と軍人の役が似合うと言われるが、ギャルから人妻まで総娼婦化している元気のいい女性に比べて日本の男はサエナイ。企業戦士とか見栄を張っていた時代もあったが、所詮マガイモノでしかなかった。

その男たちがやっと本当の戦闘に出会えた。負傷した巡視船「あまみ」の乗組員は毅然としていたし、22時9分を「フタフタマルキュウ」と言う第十管区海上保安本部の職員もプロっぽく頼り

になりそうだった。特攻隊が好きな首相にも、ブッシュの脇役的立場から脱しようという意欲がみられた。

ひょっとしたら、日本の経済危機に対する特效薬は「戦争」という劇薬なのかもしれない。

2002年1月4日(金) 幸福の代償

21世紀最初の年に我々は多くの人々が究極の悪と考える二つの犯罪をみた。ひとつは9月11日のWTCに対するテロであり、もうひとつは大阪教育大学附属池田小学校の児童殺傷事件である。いずれの場合にも犠牲者に非はなく、犯罪は加害者の一方的意志により行われた。しかし、加害者に動機がないわけではなく、前者においてはWTCが米国の繁栄の象徴であり、後者においては附属池田小学校がエリート養成校と考えられていたことが標的になった理由なのだろう。

WTCで働いていた人々は貧しい労働者も多く、必ずしもイスラム原理主義者に恨まれるような階級ではなかった。しかし、大きな歴史の流れの中では、あの場所は世界の貧者の憎悪が向けられる所だったのである。

附属池田小学校の児童も必ずしも富裕階級の出ではなかったろうし、そこにいて将来が約束されていた訳でもなかった。しかし、人生の敗者であると思い込んでいた宅間守は自分には失われた可能性・夢を持つ児童に殺意を抱いたのである。

国際的なダイナミクスの中で発生したテロと宅間守という特異な個人が引き起こした犯罪は、マクロ及びミクロのいずれの局面においても今世紀が困難なものになることを予感させる。競争心があり、その結果常に不満を持つことが他の動物と人類を区別するひとつの特徴であるという人がいるが（さらに言えば、人類の種の中でもクロマニヨン人のほうがネアンデルタール人より攻撃性が強かったので勝ち残ったという）、これまではそのエネルギーが文明の発展に寄与してきたようにみえる。

国家間の争いにおいても、また個人の間においても、これまで敵は明瞭で、弁証法的な歴史の展開により、専制的、階級的な社会からより民主的で平等な社会に発展してきたと言える。しかし、今日の社会は複雑である。アメリカを批判することは簡単だが、アメリカは従来 of 帝国主義国家と同列に論じられないし、ナチスドイツやソ連が勝者であった場合と比べてみれば我々はより良い世界に生きていると思う。日本においても、新しい階級が生まれつつあると言う人はいるが、一昔前のように働かないで食っていける階級はない。

このような敵が誰か分からない社会では、不満は幸福そうな人々に向けられる。幸不幸は相対的

なものであるから、幸福な人々はその存在自体が不幸な人々を作り出している。人間はみな平等であるという理念と、マスメディアの発達によって誰の目にも明らかになった幸不幸の格差はこの敵意を増幅させる。

生物のある種を他の種に優越させている遺伝子が環境に適合しなくなれば、その優越的な立場は失われ、衰退していく。人類をこれまで勝利に導いてきた競争心（攻撃性）を規定する遺伝子が人類という種にとり有害になりつつあるのかもしれない。

2002年1月15日(火) アンダーワールド

先日の新聞のコラムに、不良債権処理が進まないのは不良債権を通じて官僚や経済界にアンダーワールドの勢力が深く入り込んでいるからだと書いてあった。これは常識なのかもしれないが、その方面にうといのでビックリした。これで日本経済が崩壊し、世界恐慌が起きたら、その原因はヤクザだということになる。

私が仕事を通じてそちらの社会の人間と会ったのは多分2回だけで、ひとつはマイケル・ジャクソンの日本公演がらみだった。

1985年の春頃、映画「乱」の関係者の紹介ということである会社が契約書を翻訳してくれとやってきた。その契約書がマイケル・ジャクソンの日本公演に関するもので、簡単なものだった。契約書を持ってきた男は、筋肉質の長身、眼光鋭く、動きに無駄がなかった。私が普段相手するくたびれたサラリーマンとは雰囲気違っていった。話してみると頭も切れ、魅力的な人物だった。

仕事はすぐ終わったが請求した翻訳料は払われず、そのうち山口組の幹部がFBIのおとり捜査にひっかりハワイで捕まったというニュースが流れた。山口組系の竹中組相談役竹中正と織田組組長織田譲二はマイケル・ジャクソン公演の手数料と称してとられた55万ドルを取り戻そうとしてハワイに乗り込んだところ、麻薬取引と銃器密輸の嫌疑にて逮捕されたとのこと。そもそもマイケル・ジャクソン日本公演自体がFBIがでっち上げた架空のものだった。

結局私はFBIの作った契約書を翻訳したようで、お金は払ってもらえなかった。契約書を持ってきたあの男は多分山口組の人だったのだろう。前述のおとり捜査はホノルル連邦裁判所でさばかれ、陪審評決により竹中・織田両氏は無罪になった。この顛末は元山口組顧問弁護士山之内幸夫氏の「山口組太平洋捕物帳」（徳間書店）にくわしい。

さて、もうひとつのアンダーワールドとの遭遇については別の機会に。

2002年4月16日(火) 自爆テロと三島由起夫

自爆テロをアラブに持ち込んだのが日本人だというのは結構有名な話だ。それは1972年5月30日のイスラエルのロッド空港襲撃事件で、26人が殺された。テロリストは日本赤軍の奥平剛士、安田安之と岡本公三で、岡本だけが生き残った。岡本はアラブ世界の英雄になった。

ロッド空港事件以前にもアラブでテロやハイジャックはあったが、みな犯人が生きて帰ってこようとするものだった。日本赤軍の三人のテロは敵の中心部にしかけたもので生きて帰れる可能性はゼロだった。このような行動をイスラエルとの抗争に無関係な日本人がとったことにアラブ世界は衝撃を受けた。これが後にジハードと結びつき今日の自爆テロになった。

では奥平たちはこのような方法を誰に学んだか。1969年全共闘の活動が最も過激になったころ安田講堂での有名な攻防戦があった。これを見ていた三島由起夫は、誰かが安田講堂の上から飛び降りて死ねば本当に革命が起きると政府要人に注意を促した。しかしそれは杞憂でそのような勇気のある者はいなかった。翌1970年11月25日、三島由起夫と森田必勝が腹を切り衝撃が日本を走った。

ほとんどの週刊誌が特集号を出し（週間プレイボーイまで）、それが駅の売店から数時間で姿を消していった。既成右翼の反応は鈍かったが新左翼の一部が三島たちの行動を評価し、京都大学のキャンパスには三島たちをたたえるタテ看が立った。その当時奥平と安田は京大工学部の学生だった。

安田講堂で誰も死ななかつたように日本の左翼には自爆テロの伝統はない。戦後右翼も三島以前は同様だった。だから三島事件は誰にとっても衝撃だった。

奥平と安田が三島の後継者であったというわけではないが、三島事件がなかったらロッド空港事件もなかっただろう。三島のまいた種はイデオロギーや宗教を越えて繁殖し、昨年はWTCを襲った。三島の荒ぶる魂はこれをどう見ているのだろうか。

2003年7月22日(火) 援助交際とブランド

普通の小学生の女の子が援助交際をするのは多分日本だけだろう。彼女達が得た金で買うのはブ

ランド品だという。渋谷の109には小学生向けのブランドショップがいくつもあるとのこと。

主要な高級ブランドの日本での売上は全世界の1/5から1/3を占めるという。日本での売上が世界の1/3（昨年度で1357億円）になるルイ・ヴィトン・ジャパンの社長は日本人がブランド好きである理由は「日本には伝統的にいいものを長く使う文化がある」からだという（朝日新聞2003年7月19日）。しかしヴィトンのバッグが本当に長持ちするいいものなら、毎年買い替える必要はない。

ブランド好きの言い訳はまさに「良いものは長持ちする」ということには尽きるが、その連中が毎年新作を買いあさっている。新作のヴィトンのバッグは何ヶ月も待たないと手に入らないという。洋服でも靴でも毎年ファッションは変わり、去年流行したものを今年使うのは勇気がいる。なぜ勇気がいるかというと、同性の目があるからだ。男には去年の流行と今年の流行の違いは分からない。

ブランド好きも日本人の横並び指向のひとつの表れで、ブランドを身につけることがあるグループに属する条件になっている。

ヨーロッパであれば、ブランドを着るグループは少数の特権階級になるのだろうが、階級のない富裕な日本においては、ブランドは誰でも手が届く「擬似階級」へのパスポートなのだ。

よりよいものが金をだせば手に入れられるのは資本主義社会のいいところだろうが、それを持つこと（または持たないこと）が脅迫観念になっているとすれば健全ではない。今更日本人の横並び意識を変えろといっても実際的ではない。ブランドを全面的に禁止したり規制するのも難しい。しかし子供をブランドの毒から守ることはできるだろう。

提案としては、小学生、中学生には親同伴の場合を除き**円以上の品物を売ってはいけないことにする。高校生も上限を上げて同様に規制する。違反した業者は厳罰に処す。

石原都知事、東京から始めませんか？

2003年9月13日(土) 民主主義とテロ

三島由起夫と石原慎太郎の対談でテロを肯定したものがあつたはずだと書庫を探したがみつからなかった。いずれにしても石原の思想は昔から一貫している。

石原の今回の発言には批判が多いが、このような場合民主主義がどれだけ有効かは検証してみる

必要がある。

外務省の腐敗と亡国的な行為に怒っている青年A氏がいたとする。彼は民主的に問題を解決しようと考え、国民の権利である選挙権を行使し主張を同じくする候補者に投票し当選させる。しかし議員になった候補者は公約を忘れ態度も豹変しA氏がなにを言おうと取り合わない。そこでA氏はこんどはもっとまともな候補者に投票しようとするが、そこであることに気づいた。これまで何回か投票したがいずれも一票差で当落が決まったことはなかった。さらにこれまでの国政選挙の結果を見ても一票が当落に影響したケースは皆無だった。ということはA氏が次の選挙で投票しようが棄権しようが結果は同じだということだ。つまり一人の人間の選挙権は絵に描いたモチ、なんの役にも立たないのだ。

そこでA氏は政治結社を作り外務省改革を旗印にして人を集めた。右や左や宗教やいろんな人がいてまとまりのない結社だったがそれでもA氏は数年後に市議会議員になることが出来た。しかし市議会では外務省改革は議題に上ることはなく、A氏はやはり国会議員にならなければと思った。さすがに国会はハードルが高く、既存の政党に頼るしかなく、A氏は外務省改革をやりそうな政党に多額の寄付をして汗をかき、やがて推薦を取り付け数年後に国会議員になることが出来た。しかしその政党は威勢はいいが力がなく、何を言っても外務省は歯牙にもかけなかった。A氏も歳をとり夢のようなことばかり考えている訳にもいかず政治資金を集めることに汲々としていた。そして歳月が流れた。

A氏は黒塗りの高級車の中から国会の上に翻る人共旗に目をやった。来週は将軍様の米寿のお祝いだ。新国立競技場のマスゲーム、軍事パレード、そしてテポドン13号の打ち上げと色々と行事が予定されている。2030年の朝日併合によって誕生した朝鮮人民民主主義共和国日本州の初代知事であるA氏は来週の天気が良いことを祈った。

2005年5月7日(土) ボウリングに行ったのはどうして悪いのか

JR西日本の社員43人が脱線事故の当日ボウリング大会に参加し、その後懇親会に行ったことが非難されている。彼らの弁護士を勝ってにやってみよう。

まず、そもそもJR西日本が悪いのか（JR西日本の故意過失が立証されていないのでJR西日本はあなたや私と同様に無罪の推定を受ける）という議論はあるが、とりあえずJR西日本は有責だとしよう。法人としてのJR西日本やその社長、運転手（過失があったとして）に責任があるとしても、上記43人には法的責任はない。でも、道義的責任はあるというのが世論なのだろう。なぜ？JR西日本の社員だから？

JR西日本は江戸時代の藩ではなく、宗教団体でもなく、株式会社である。その従業員は会社の一部ではなく、会社に隷属しているわけではなく、会社の思想なり信条を信奉しているわけでもなく、多分会社を愛しているわけでもなく、単に会社に労働を提供して賃金を得ている労働者である。43人は当日全員休暇をとっていたとのことで、その日は会社の拘束を受けていなかった。管理部門の社員に召集がかけられたとのことだが、その対象にもなっていなかった。

彼らはその日、自由な個人だったのだ。あなたや私と同様に。あなたはその日悲惨な報道を見ながら酒を飲まなかったか。彼らを非難しているテレビ局は悲惨な事件の報道中頻繁に脳天気なコマーシャルをさしはさまなかったか。それは、人間として不謹慎ではないのか。ある会社にたまたま属していたということで人間としてすべきこと、してはいけないことが異なってくるのか。

こんどの事故は、一度に多くの人々が亡くなったので注目されたが、もっと犠牲者の多い事故は日常的に起きている。日本だけに限っても、毎年一万人近い人が交通事故で死んでいる。その原因はほとんどが自動車だ。だとすれば、自動車会社には今回の事故の百倍の死について責任があることになる。法的責任は問えなくても道義的責任はあるのではないか。それならば、トヨタの社員などは毎日謹慎していなければならない。

というような議論はできる。マスコミの主張に同調するだけではなく、異なった見方ができないかと考えることは大切だ。

2006年9月27日(水) 残酷刑

奈良女児殺害事件の小林被告に死刑判決が言い渡された。しかし、それを一番喜んでるのは小林被告のようだ。宅間守の場合もそうだったが、本人が死刑を望んでいる場合には死刑は罰にはならない。むしろ、死刑になりたくて凶悪犯罪を起こそうとするやからを増やすのではないかと懸念する。

奈良女児殺害事件の被害者の父親が極刑以上の刑を望むと言っていた。それはすなわち残酷刑である。残酷刑は憲法で禁止されている。しかし、宅間や小林のような犯罪者に対抗するためには残酷刑の復活も考えるべきだろう。

思うに何が残酷かは一概に言えない。人によっては無期懲役の方が死刑より残酷と感じるかもしれない。また、人生が苦痛で生きていることが耐え難い人にとっては死刑は僥倖だろう。

そもそも、死は誰にもやってくるもので、それを早期に到来させたからと言って残酷だろうか。絞首刑は苦痛の少ない死刑だと言われている。宅間守は死刑にならなかつたらもっと苦痛に満ちた死を迎えていたかもしれない。実際の話、今日多くの人間が経験する病院での延命治療と緩慢な死はどんな残酷刑より残酷ではないか。世界の歴史に記されている残酷刑のどれも何ヶ月もかけて殺すことはない。たいていの刑罰は何時間か我慢していれば死が解放してくれる。

世の中は矛盾に満ちている。

2006年10月31日(火) いじめ

何度も書いたことだが、腹が立つので。

今朝テレビのワイドショーを見ていたら、中2の少女が自殺した件で、その生徒が通う中学の校長の発言が二転三転したことが問題にされていた。レポーターが、その校長を無責任だと非難すると、3人のコメンテーターは異口同音に賛成した。あるコメンテーターは言葉のいじめが肉体的な暴力より酷い場合があるといい、いじめの定義が必要だと言った。連中は自分たちがいじめる側にまわっていることに気づいていない。

いじめの定義は「多数が少数を攻撃すること」、それだけだ。攻撃の理由は問わないし、どちらが正しいという価値判断はしない。ひとりの校長を全マスコミが非難すれば、それは立派ないじめである。校長に非があったとしても然り。誰にでも何がしかの非はあるし、多分ほとんどのいじめは、いじめられる側にも何らかの問題がある。そして、いじめる側は、自分たちは正しいことをしていると思っていることが多い。

日本の社会はいじめ社会だ。学校でも、会社でも、あらゆる集団でいじめが行われている。それは日本人が付和雷同の遺伝子を持っているからだ。自分の意見がなく、人の顔色を見て、多数派と思える方に付く。何か問題があれば、我先にと多数派に走り、取り残された者がいじめの対象になる。

今朝の番組では、丸山弁護士が、自殺には色々原因が考えられ、いじめが原因と認定することは難しいとまともな意見を言いながら、結局はなし崩し的に校長を非難する側に付いた。ここで校長を弁護したら自分がテレビから干されると思ったのだろう。

米国の弁護士がよく使う言葉で devil's advocate というものがある。文字通り訳せば悪魔の代理人だが、議論の際に故意に反対の立場をとる人、の意味だ。たとえば、原告側弁護団が議論をしているときに、一人の弁護士が、自分が被告側弁護士だったらこういう議論をすると被告側の主張

を代弁する。こうすることによって原告側の弱点が見える。一方の側からだけ考えていても真実は見えてこない。

テレビに出る弁護士は devil's advocate の役を買って出るべきだ。どちらの側でも議論ができるというのが弁護士のプロたる所以ではないか。

2006年11月15日(水) いじめ自殺

今日の日経の朝刊に、ある学長が次のように述べている。

「集団の中で自分の役割や行動が他者に及ぼす影響を自覚すれば相手の気持ちを考えることができるようになる。学校教育の中に集団活動や体験活動をもっと取り入れ、社会性と人間性を豊かにする教育を行うべきだ」

全く反対である。日本の学校のいじめは過度の集団主義が原因なのだ。学校という大きな枠の中に、クラスがあり、その中にグループができる。横断的には部活がある。生徒はどこかの集団に属さなければ生きていけない。集団は排他的である。日本人は自我が希薄で個性がないから、集団の構成員は容易に同化し集団の個とでもいうべきものが出来上がる。でも集団にはそこに入れない異端が必ず存在する。集団にとって異端は異物であるから排除しようとする。異物を同化させるより排除する方が容易だ。だから、いじめで「死ね」というのは、人の痛みがわかっていないからの言葉ではなく本音なのだ。最近の例でも明らかのように、自殺者に対していじめた生徒は一つも罪悪感を感じていない。

だったら集団に属さなければいいだろうという意見がある。自殺するぐらいなら、学校を辞めてしまえという考えだ。しかし、これは引きこもりになれということで、自殺と大差ない。学校を辞めても社会には居場所がないのだ。今の日本で、子供の世界だけでなく、集団に属さないで生きていくのは難しい。私は中学高校の間一切部活をしなかった。これは結構きつかった。普通の人間は、本当は嫌でも、どこかの集団に自分を曲げて属してしまう。

いじめの対策があるとすれば、それは日本人の集団主義を変えるということしかないだろう。集団活動をするなら、仲良しの集団をつくるのではなく、必ず誰かを排除する集団を体験するべきだ。順番に全員が異端の立場に置かれる。そうすれば、異端の苦しさはわかるし、案外いいものだと思うかもしれない。あと、ディベートを授業に取り入れて、常に反対の立場が成り立つことを実感すればいい。

最後にマスコミは、自らのいじめを止めて、反対意見を常に表明させる番組を作れ。

2008年4月28日(月) 硫化水素自殺と国営自殺施設

硫化水素自殺が流行っている。死刑志願者の殺人事件も連続して起きている。

自殺の付随的損害 (collateral damage) について書いたものは知らないが、自殺の巻き添えによる死亡やケガだけでなく、電車への飛び込みによる混乱、自殺のあった家屋、ホテル等の価格の下落を勘案すれば多大な損害だと思われる。このような損害を減らすためには勿論自殺をなくするのが一番である。しかしそのための効果的な手段は無い。

なぜ自殺が付随的損害を発生させるかという、損害のリスクの無い自殺を可能にするための工夫がなされていないからである。普通国民のニーズがある場合、国であれ民間であれ、それに対応する手立てを考える。しかし、自殺については議論だにされていない。

報道によれば、硫化水素自殺が選ばれる理由としては、それが確実であり苦痛も少ないからだという。死刑についても国が執り行うので確実であろうし、多分苦痛も自殺に比べれば少ないのではないか。昔死刑の施設を見学したが、それは1階と2階からなっていて、2階の中央の床が開き首に縄をかけられた死刑囚は1階に落ちていく。加速度がついて落ちるので1階の床に着く前に首の骨が折れるようになっている。多分そこで意識がなくなるのだろう。これは一般の住居では不可能だ。

自殺の根絶が不可能だとすれば、その被害を最小限にするのが国の責務である。そのために国営自殺施設を作るという考えは荒唐無稽ではない。第三者に被害が及ばない場所を提供することは容易だし、苦痛が少ない確実な方法も国であれば簡単に提供できる。

そもそも、生きてることが苦痛な人間に生きることを強いるのは拷問に等しい。人間はだれも自分の選択で生まれてきたわけではなく、死ぬ権利は基本的人権ではないか。要はそのような選択が安易に行われないように配慮すればよいのだ。

国営自殺施設を利用するためにはカウンセリングを受け、一定期間を置いて決意が変わらないときのみ利用を許可する。多分投薬によって多くの人が自殺しなくて済むようになり、むしろ自殺者は減るかもしれない。18歳未満の者は原則利用禁止とする。犯罪に利用されることもあるから不審な場合は警察が調査する。

実際にこのような施設が出来るかという、まずありえないだろう。ナチスのガス室を連想させるので議論さえされないだろう。しかし、無為の結果犠牲になる第三者はこれから増え続けるだ

ろう。

2008年12月27日(土) 飯島愛の孤独死

まだ死因も明らかになっていないので輕輕にはコメントできないが、孤独死であることは確かなようだ。そしてマスコミは孤独死を悲惨なこととして報道している。

孤独死の反対の状態は家族や親しい人に囲まれて息絶えることなのだろうが、本当にそれが幸せか疑問だ。

私は勿論死んだことはないし臨死体験もないので想像でしかないが、人に見られながら死ぬのは嫌だ。

まず、死んでいく人とそれを見ている人の間には無限の距離がある。明日がない人の見る世界と明日がある人の見る世界は全然違うのではないか。死んでいく人にとっては、生きていく人は自分に共感することも理解をすることも出来ない存在ではないか。

上記は死んでいくときに周りに人がいようがいまいが関係ないという消極的な孤独死肯定の根拠だ。次はより積極的に周りに人はいない方がいいという話。

例えば肺がんで呼吸が出来なくなって溺れるように死んでいくとしよう。そのとき周りに人がいても誰も助けられない。死んでいく人は必死に呼吸をして死から逃れようとするだけで誰がそこにいようと関係は無く、一人で死と向かい合う。死は誰にとっても孤独な作業なのだ。

ではそのような孤独な作業を人に見られたいか。死に直面した人は自分が社会的な存在であることを忘れるに違いない。というかそれどころではない状況。だから体裁もカッコも忘れて髪振り乱して必死に生きようとする。冷静だったらそんなところを人に見られたいか。

まあ武士の切腹のような社会的な死、表現行為、の場合は最後の行動として人に見られてもいいのだろう。でもそれは特別な死で、凡人には無理だ。

私も多分凡人としてみっともなく死んでいくのだろう。だったら最後の瞬間は一人でいたい。自分と死との一対一の関係を誰にも邪魔されなく味わいたい。

象が群れから離れて孤独な死を迎えるように。

2011年4月20日(水) 日本人の公德心

震災に関して、暴動や略奪が起きないことから、日本人の高い公德心が賛美されている。先日もハーバード大学のサンデル教授が参加した番組がNHKであった。最初のみ見たが気持ちが悪い内容だったのでやめた。

何故日本人には宗教を信じる人間が少ないのにこのように公德心があるかについては議論がある。美意識が高いという人がいるがそうだろうか。

私は、別に日本人が高い公德心を持っているとは思わない。単に人の目を気にするから悪いことが出来ないだけだ。宗教は戒律で人を縛るが日本では世間の掟がその役目をする。その掟の内容は不明確なので日本人は常に人の目を気にする。

阪神淡路の時も今回も、社会が崩壊したわけではない。だから世間の掟は有効に働く。誰も見ていないとしても、刷り込まれた世間の拘束は我欲を自由にさせない。

世間がなくなったとしたら、日本人の公德心はどうなるだろう。多分宗教の拘束がないぶん秩序を失うだろう。

自分の周りの社会が存在しても、それと敵対する相手に対しては道徳的であれという指令は誰からも発せられない。戦争になれば日本兵はもっとも残酷だ。

要するに日本人は自分の周りの世間だけを気にして生きているのだ。